

●今やアメリカのスカウトは  
日本全国を飛び回っている

Baseball

# 野球

## ノモとイラブの活躍が アメリカ人の「サムライ野球 異質論」を一変させた

イエール大学文化人類学部長

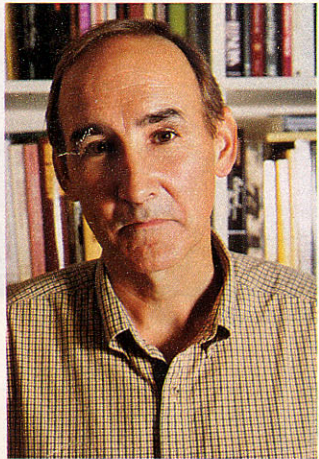
### ウィリアム・ケリー

WILLIAM KELLY

いま、アメリカの大リーグフ  
ァンの間には大変な「日本ブ  
ーム」が巻き起こっている。これ  
まで日本の一流選手はメジャー  
でプレーできなかったが、野茂  
に続いて伊良部が注目を集め、  
日本野球への関心を高めている。  
イエール大学文化人類学部長で、  
ヤンキースの諮問委員でもある  
ウィリアム・ケリー教授は「こ

の現象は文化人類学的にもとて  
も興味ある出来事だ」と語るの  
だ。  
取材／田畑満美  
構成／角間 隆  
いま、日本全土をアメリカの  
大リーグのスカウトたちが血ま  
なこで走り回っている。言うま  
でもなく「ノモ・イラブ現象」  
に触発されてのことだ。

Toshi Sasaki



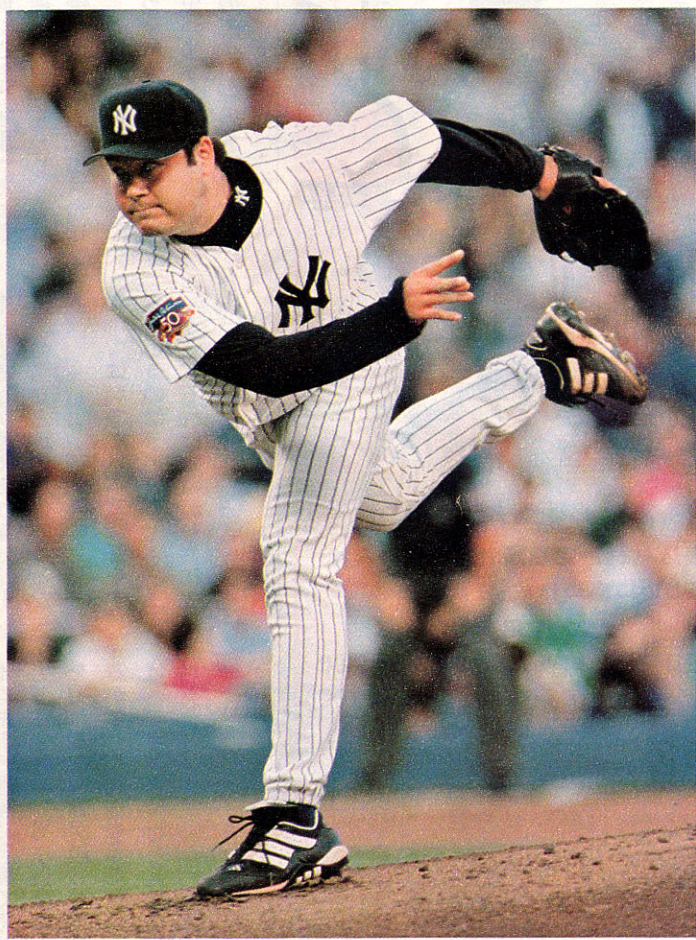
日本のベースボール・プレー  
ヤーの実力が正しく評価される  
ようになり、ニューヨーク・ヤ  
ンキースのジョージ・スタイン  
ブレナーのような型破りのワン  
マン・オーナーばかりではなく、  
アメリカ野球界やファン全体が  
空前絶後ともいえるべき「日本ブ  
ーム」に煽り立てられ始めたか

らである。「第二、第三のノモ・  
イラブを探せ」とばかり、ア  
メリカのスカウトたちが北は北  
海道から南は沖縄まで、汗だく  
になって駆けずり回っているの  
もそのせいだ。「ひとたび日本で  
プロ入りしてしまつたら獲得が  
極めて困難になってしまう」と  
いう理由から、「未完の大事業」に

異例中の異例と言うべきで、彼  
自身の「日本人離れ」した大胆  
不敵なビヘイビアと、アメリカ  
のプロ野球業界でも傲岸不遜を  
もって鳴らしているスタインブ  
レナー・オーナーの「蛮勇」が  
なければ、とうい実現し得な  
かつたのではあるまいか。  
日本の野球界についてはロバ  
ート・ホワイティング氏の「日  
本のサムライ野球はベースボ  
ールとは違う」とする『菊とパ  
ット』の意見が100%受け入れ  
られてきた。  
アメリカ人全体の間に、「日本  
は根本的に異質である」といつ  
た潜在的な意識があり、それが  
「サムライ野球」論などと短絡

ツバをつけるため走  
り回っているのだ。  
日本のプロ野球界  
の現状は旧態依然と  
して非常に保守的で、  
日米間の選手交流を  
極めて困難なものに  
している。イラブの  
ケースなどはまさに

ロイター・サン



「イラブなどまだ可愛いほうだ」(ケリー教授)

<PROFILE>1968年、アマースト大学卒業。80年、ブランダイス大学で文化人類学の博士号を取得。84年よりイエール大学教授。95年より文化人類学部の学部長を務め現在に至る。専門分野からの野球の研究者としても名高く、96年から97年にかけて、日本のプロ野球のフィールド調査のため3回来日している。

的に結びついて、  
「とても日本人選手は受け入れにくい」  
といった感じのムードが支配的であったのだ。

しかし、私は、そろそろアメリカ人も、こんなステレオタイプな「日本人観」から脱却するべきではないか、と思っている。特に「野球」の分野については、一刻も早く日本野球への評価を改めなければならぬ、と痛切に感じている。

確かに、「野球」はアメリカから日本に移植されたものであり、長い間、体格的にも実力的にも「アメリカの方が圧倒的に日本人より優れている」という思い込みが日米双方に深く浸透していた。しかし、ノモやイラブのアメリカへの逆上陸が、いまや、そのような「サムライ野球」的な先入観に抜的な変革を迫っているのだ。

そうした先入観を真っ先に打ち破ったのがいうまでもなく、ロサンゼルス・ドジャースに入団したノモであり、彼は持ち前の真摯さで、たちまちのうちにアメリカプロ野球ファンのみならず、国民全体のアイドル的存在にのしあがっていった。現に、私の周辺で、これまで野球に関心を示さなかった大学教授やジャーナリストたちがわかに「ノモ」だとか「ドジャース」などという言葉を口にし始めて

いる。

要するに、アメリカ人一般を支配していた一種の「食わず嫌いな異質文化論、すなわち「サムライ野球」的な日本人観を、「ノモ」という名の全く新しい世代の日本人がたつた一人で打ち破ってしまったのだ。これは、文化人類学的にも大変興味深い社会現象である。

### これからは実力だけがすべてのカギになる

また、これは21世紀のグローバル社会の行方や在り方を考えてゆく上でも非常に重要で、大規模な「ボーダーレス化」の波が国際社会全体を押し包み、「あらゆる分野における自由化と民主化」が声高に叫ばれつつある今日、日本のプロ野球界だけが旧態依然たる「鎖国」状態の中で惰眠をむさぼっているわけに

はいかない、ということを示唆している。

同じような意味において、ニューヨーク・ヤンキース入りした「イラブ」のケースも真剣に見守る必要がある。聞くところによれば、日本人の一部には、「イラブの態度は日本人らしくなく、アメリカ人に嫌われるも」となる

といった感じの憂慮を示すものもあるという。政治や外交、経済、社会などの分野についてもよく出てくる「日本人は国際的な嫌われ者だ」といったふうな自虐論が遂に野球の面にまで表われてきた、ということであろうか。

しかし、アメリカのプロ野球選手、特にニューヨーク・ヤンキースの選手たちのグリー・デー（強欲）ぶりは天下に鳴り響いており、「イラブなどまだ可愛い

「誇り高き絶対君主」として名高いジョージ・スタインブレナーは、断固として異例の大金（約15億円）を注ぎ込んで採用に踏み切った。つまり、彼にとつては「サムライ野球」への迷妄を打ち破って見せることが最高の自己顕示欲充足の手段だったのだ。

しかし、短気と気まぐれで有名な彼のことだから、いったん「イラブは商売にならん」と感じたら、二軍に落とすどころか、一夜のうちに彼を切り捨てるかもしれない。要するに、来るべき未来社会は、これまでのようなウエットな日本的集団主義が全く通用しない、実にドライなビジネス主義の社会であり、実力だけが全てのカギとなる、ということである。

ところが、これまでの日本社会の論理では、決してプロ野球といえども例外ではなく、あくまでもサムライの一人として集団に奉公する代わりに、終生その身分は保証される。要するに、普通の企業と同じような一種の終身雇用制の体質が働いており、たとえ現役選手としての生命が尽きたとしても監督やコーチとしての座が与えられるし、外部に出たとしても評論家やタレントなどとしてマスコミの周辺で生き延びられるチャンスも用意されている。また「チームの先輩」というだけの理由で後輩に

たる影響力を行使することができるといえる。

アメリカでは、このような「サムライ一家」的な環境は全く無い。いかに「かつての名プレーヤー」であろうとも、監督はおろかコーチに起用されることすら珍しく、マスコミのスターとして再活躍できるチャンスなどほとんどない。だからこそ、あくまでも「集団の一員」としてではなく「インディビジュアル」（個人）として我が身を守り抜こうとするわけである。

しかし、日本的な家族主義経営も、これから21世紀にかけての「ポスト・ビッグバン時代」には次第に難しくなってくるであろうし、何よりも国際的なボーダーレス化の大波の中では「イレギュレーション（規制緩和）」に踏み切って行かざるを得なくなるに違いない。選手たちもそうした社会背景を敏感に感じとり、ひとりイラブばかりではなく、これからの日本の若いプレーヤーの中には、このような「脱サムライ一家」的なインディビジュアル意識を持ったものが沢山出てくるであろう。なぜならば、日本の企業社会が向かいつつある、「ビジネス・イズ・ビジネス」の風潮は早晩プロ野球界にも及ばざるを得ないからである。野球は社会の流れを映す鏡でもあるのだ。

ライター・サン



強引なスタインブレナーでなければイラブを持ってこられなかった。

ほうだ」というのがごく一般的なアメリカ人の見方である。なぜなら、野球選手というのは契約期間が終われば即クビになる、というのが常識だからだ。だからこそ、契約交渉に臨む時にはあくまでも「稼げるうちに稼いでおこう」と粘りに粘るのである。

イラブに関しては、